

# 文禄五年豊後地震における奈多宮の津波高

松崎伸一\*(四国電力株), 日名子健二(郷土史研究家), 平井義人(大分県立芸術緑丘高等学校)

## § 1. 文禄五年(1596)豊後地震と奈多宮

大分県国東半島南東部に鎮座する奈多宮は、豊後地震津波で社殿が流失したと云われる。都司・他(2012)は、『豊城世譜』(1834)の「奈多宮本社拝殿楼門鳥居残りなく沈没す」という記述等から社殿の流失を指摘する。そして、きつき城下町資料館の職員から「慶長地震の時から場所は変わっておらず、神社は地震後に再建したが、同じ場所に建てられた」との証言を得たとして、奈多宮の地盤高を 6.36 m と測量した上で浸水深を 2 m と仮定して、津波高を 8.4 m と推定している。しかしながら、『豊城世譜』は地震の約 240 年後に成立した史料であること、社殿位置を不変とする根拠や地震当時の社殿地盤高を証する根拠が不明であることから、十分な検証が必要と考える。

## § 2. 社殿流失を支持する史料

『閑居口号』(1711)という杵築藩士・諏訪寛村による史料がある。その中に当時の奈多大宮司から聞き取った記述として、「本社拝殿楼門鳥居、不残潮にひかれてあとかたなく成りける」とある。『豊城世譜』は『閑居口号』のこの記載を引用したものと考えられる。つまり記録の成立が地震の約 100 年後に遡る。

さらに筆者らは、奈多宮の宝物の一つ、「一楼台」額の裏に津波被害を記す一文を発見した。「一楼台」額は康和年中(1099-1104)に奉納されたものであるが、豊後地震津波で流失したとされ、現存する額は寛文三年(1663)、細川藩長岡寄之が奉納したものである。その額裏文には、「慶長元年秋津浪、諸殿没溺于蒼海、為松浜矣…(略)…以寛文三年八月廿九日詣当宮奉納之訖」とある。地震から約 70 年後の成立であるが、諸殿が浸水したことを書き留めた公文であり、社殿や扁額の流失を示唆するものである。

## § 3. 津波高 8.4 m に対する疑問

しかしながら一方で、社殿を一掃するような 8.4 m という高い津波高に疑問を抱かせる史料もある。先の『閑居口号』には、「本社拝殿楼門鳥居、不残潮にひかれてあとかたなく成りける」の記述に続いて、「若宮殿一宇、少しも損じ不申事奇代なりける」とある。流失しなかった建物があることを記しているのである。

さらに奈多宮の宝物にも不思議な点が見られる。地震の前、奈多宮には「一楼台」額を含み 4 つの扁額があったが、津波で全て流失したと云われる。一方では多くの宝物が現存する。例えば『八幡三神像』(平安期作)や『御託宣集』(1456 奉納)等である。扁額が全て流失しながらも、なぜ多くの宝物が残ったの

か。豊後地震で奈多宮の建物全てが流失したのではなく、残存した建物もあったと考えるべきと解釈する。

## § 4. 奈多宮周辺の津波高の推定

『閑居口号』は奈多宮周辺の津波被害も言及する。神場洲では、「神場御旅所の御殿諸楼等、潮に引き取られ、今は磴の石ばかり残れる」とある。しかし、「されども其翌年は神場の跡に仮殿を志つらひ、行幸なし奉る」ともあることから、壊滅的な被害ではなかったと考える。寛村は奈多宮から海岸伝いに神場に入り上記記述を残した後、「道すがら此物語りを聞いて行けば、無程住吉大明神の鳥居に至る」と記していることから、神場御旅所は住吉社(1689 奉祀)の南付近にその中心があったと推測する。現住吉社の南付近の地盤高は 3 m 程度であり、被害状況から浸水深を 2 m とすると津波高は 5 m 程度と推定できる。

加茂社は、「昔より石の華表ありしが、慶長元年七月の津浪に打ち倒れ」とある。『大分県社寺名勝図録』(1904)には河口近くに鳥居(現存せず)を確認できる。倒壊した華表(鳥居)はこの位置にあったと思われる。現在の地盤高は 2 m 程度であり、浸水深を約 2 m とすると津波高としては 4 m 程度が推定される。寛村は、奈多宮、神場洲、磯崎八幡で社殿等が流された場合には、その旨を明記している。加茂社については鳥居以外の被害には触れていないことから、社殿は流失しなかったものとする。現存社殿は背後に自然丘陵を擁し、神社に相応しい地であるため、豊後地震時も現在地(地盤高約 3 m)に鎮座していたと推定できる。社殿が流失しなかったことから浸水深は 2 m を超えるものではなく、1 m 程度と仮定すると、津波高としては 4 m 程度が推定される。以上より奈多宮周辺の津波高を 4~5 m と推定する。

## § 5. 奈多宮の津波高の推定

現在の社殿は周囲の中では比較的高い地盤にあり、その標高は 6 m 程度である。流されなかった建物(若宮殿)がここにあったと仮定すると、8 m を超える津波高は考えられない。7 m 以下と考える。前述した加茂社や神場洲は、奈多宮と 4 km 程度しか離れておらず、奈多宮地点は津波高が特に大きく増幅するような地形でもない。したがって、奈多宮における津波高も 4~5 m と推定する。なお扁額の消失については、楼門が現在とは異なり標高 3 m 以下の低い地盤にあった可能性、地震動で楼門が倒壊し津波で流失した可能性、安岐城主・熊谷直陳が城普請のため解体・流用した可能性などもありうる。と筆者らは考える。